生の技術としての哲学

――フーコーの場合

リチャード・シュスターマン（要真理子／古後奈緒子／立野良介共訳）

ミシェル・フーコーは、一九八四年六月に五七歳の若さで、エイズのため他界した。だがそのとき、彼はすでにきわめて名高く、セクシュアリティや自己-スタイルの倫理学に関する晩年の重要な論考が、まだほとんど翻訳されていなかった英語圏でも、議論を呼ぶ哲学者となっていた。彼の死後一六年を経た現在、こうした晩年の研究は、その中で彼が公然とゲイの倫理学を支持していたこともあって、大いに関心を集めている。ゲイの倫理学が巻き起こした論争のゆえに（特に学者の間では、彼が同意に基づいたS・M（サディズム・マゾヒズム）に熱烈に魅了されていたことを、どのように評価すべきかが定まっていないのだが）、フーコーの名は、アカデミックな世界でつねに注目の的となりつづけたのである。だがこれらの論争は、フーコーのそれとは別種の哲学的探求、すなわち最初にフーコーの名声を築き、いまなお彼の及ぼす最大の影響力たりえている哲学的探求から、関心がそらされてしまう危険をはらんでいる。かつてフーコーは、知の諸体系が、いかに政治的な権力構造によって形成されているか、そして、今度はいかにそれらがこの権力構造を正当化するのに貢献しているかを明らかにした。そうすることで彼は、最も評価の高い学問のいくつかと、衛生、司法、行政、教育の制度に対して、鋭い批判を投げかけたのである。

多くの学者は、この初期の研究のもつ豊かな政治的意義に心酔していたので、フーコーが後に自己-配慮の倫理学へと転回したときに失望した。美的な自己-スタイルと型破りな性の快楽を賞揚することで、フーコーの哲学は、大規模な社会制度という壮大な壁画、あるいは学問的な知という個人を超えた形式から、私的な領域へと縮減され、軽薄なナルシシズムの機嫌をうかがっているかに思われた。それでもなお、初期のフーコーと後期のフーコーの二者択一を拒否する者でさえ、その異なる哲学を結びつけて、なんとか首尾一貫した一枚の絵にするにはどうすればよいのかという問題に直面することとなった。

フーコーの遺稿集、"Dits et Ecrits"（邦題『ミシェル・フーコー思考集成』）は、この課題への取り組みの一助となる。[1] フーコーの初期の仕事と後期の仕事とを橋渡しするという目的から言えば、この四巻の論集は、制度的な知と権力に対する彼の批判的分析の本質部分をひと通りまとめた梗概、および、セクシュアリティの倫理についての考えが表明された短い評論、講演、インタヴューから成り立っているからである。S・Mについてのフーコーの最も重要な見解の一部を含むこれらのテクストは、テクストを書くことによる鍛錬（調教）および肉体の調教（鍛錬）による自己-形成についての彼の深い関心を鮮やかに浮かび上がらせる。学究肌かと思えばスキャンダルを振りまき、きわめてシニカルかと思えば情熱的な夢想家に一転する、こうしたフーコーの自己-変容を求める努力は、なるほど魅力的ではある。だがこうした営みの一切を通じて、いったい哲学的な核心は何なのかという疑問が生じはしまいか。哲学は、伝統的に知の探究と定義されてきたわけだが、それはまた真理や自己知といった認識論上の理念を、自己-配慮という、より高次の、より包括的な倫理的目的に従属させようと

する長い伝統をも有している。こうした考えはアジアの文化のうちにより明瞭に見て取れるようだが、実際には西洋の哲学においても認められる。セネカ、エピクテトス、キケロ、それにモンテーニュを通過して近・現代に至っても、彼ら西洋の哲学者たちは次のソクラテスの警句を復唱しようとしてきた。曰く、知を切望する情熱は、生を処するのに最も有効に知を生かすことを忘れさせる危険をはらむ、と。

「セルフ・ライティング」、「自己のテクノロジー」といった評論文で、フーコーは、古代から近・現代に至るまで、哲学者たちがどのようにして自己-配慮の営みを展開させてきたかについて記している。彼らはそれを、次のような様々な書記行為によって行う。すなわち、有用な思想や引用をノートに書き留めたり、自己の内面の偽らざる表明や助言の記された書簡を友人との間に取り交わしたり、自己分析や告白を綴るテクストを構成したり、モンテーニュの随想録のように、［自己を］省察し探究する随想を起草したりといった行為である。こうした「セルフ・ライティング（自己についての書記行為）」は、自己とは誰かを発見する方法であるのみならず、（フーコーが他の書物で述べているように）「禁欲、すなわち思考活動における一種の自己-鍛錬（調教）」を通じて「みずからの生き方を正しく改める試み（こと）」でもある。フーコーはドラッグおよびゲイのS・Mを通して実験を行ったように古代の食および性の管理について研究している。こうした管理は、よりよい自己-配慮を探求する自己-形成という、哲学がテクストを書くことを通じて行っている鍛錬（調教）を肉体において類比的に行うものである。

自己-配慮という哲学上の観念には、単なる維持管理（メンテナンス）という意味より、むしろ改善という意味が含まれている。だがそれはいかなる種類の改善なのか。フーコーの著作のなかでは、古代いらい支配的

であった二つのモデルについて言及されている。一つは、養生法的なモデルであり、これは医術に似ている。医者が体の健康を配慮するように、哲学者は魂の健康を改善しようと努めるからである。ただし、医者は［患者の］体が衰えて死ぬという点で敗北を喫せざるを得ないが、魂の健康を気遣う哲学者は、魂が不死であるとされるため、勝者然としていることができるのだ。ピエール・アドによって今日の学界に復活させられた、こうした［自己-配慮の］医療-養生法的モデルは、自己-扶助を描くポピュラー文学においてその勢いを増しつつある。

この医療-養生法的な理念に対して（必ずしも対立しているわけではないが）、古代哲学は、自己-配慮の美的モデルをも提示している。それは、ギリシャ人が深く美を愛したからというだけでなく、哲学が自己の基盤とする方向性を得るための指針を、多くの場合、詩および諸芸術から得ているからでもある。哲学が論争を通じて詩に対する自己自身の優越性を主張するようになったとしても、その事情に変わりはない。プラトンの『饗宴』は、哲学の源泉としての美を思慕する愛（エロース）の欲求を賞揚することによって、人を高める美の不断の探究としての哲学者の生を寿ぐ。この美に与る者はみずからの美しい生のあかしを言葉や行為のかたちで遺すことにより、一種の不死に到達するからである。この種の［自己-配慮の］美的モデルこそ、フーコーが最終的に自己-配慮の倫理学として主張したもの、「かつて実存の美学であったところの一種の倫理学」なのである。それは「美しい生を生き、他者に美しい実存の記憶を遺そうとする意志」（二五五、二五四）に導かれているのだ。フーコーはこうした美的な自己-形成という理念を、古代哲学から、種々のキリスト教的変形を経て、近代における最も顕著な表現形式、すなわち、みずからの生を芸術作品とするボードレール流のダンディにまで跡

づけていく。

医療－養生法的モデルが、健康というある種の本質的な規範を含意するのに対して、フーコーの自己－配慮の美的モデルは、プラグマティストが拠って立つ反本質主義の二つの命題を担い持つ。すなわち、自己はみずからの美的な配慮を規定する確たる本質を持たない、および、芸術はアート・ワールドにおける盲目的に崇拝されるオブジェへとみずからを限定する本質を持たない、これら二つの命題である。フーコーはこう論じる、「自己はわれわれにとって所与のものではない、という考えに立てば」、そこから引き出される唯一の帰結は次のようなものとなるだろう。すなわち、「われわれはみずからを芸術作品として創造しなければならない」ということ、これである。「ランプや家が芸術的オブジェとなってよいのなら、どうしてわれわれの生がそうなってはいけないと言えるだろう？」（二六二、二六一）。

自己－配慮を美的なものとみなすことが承認されたとしても、これまで芸術を同定してきた種々の価値――そのごく一例を挙げれば、統一性、調和的形式、快、新奇さ、独自性、等々ということになる――、まさにそうした諸価値のゆえにこそ、論争が巻き起こるだろう。つまり、この場合それらのうちのどの価値が、われわれの生を美的に形成するに際して優先されるべきなのか、と。ギリシャ人が前者、すなわち統一性と調和的形式を重視したとすれば、フーコーは後者、すなわち快、新奇さ、独自性に特権を与えているように見える。ただフーコーが統一性を批判していることによってそう見えるだけではなく、アヴァンギャルドのダンディズムと、ゲイのS・Mとを、まったく「新しい生の様式」の「発明」（一五四）として賞賛していることによってもそう見えるのである。古代の生活と芸

術作品が、伝統のうちに見いだされるモデルを創造的に変形したものであることに満足し得ていたとすれば、フーコーの言うモダニストの美的なものとは、「いまだ実現しそうもない」「予見することのできない」（一三七、一五三）ほどに、根本的に新しい何かを要求する点で、極端なものだと言えるだろう。

快を重視する古典美学の考えを引き受けながらも、フーコーは、今日、芸術に関わる言説にさえ及んでいる、融通の利かない認識上の膠着状態を脱し、それに代わって新たな活力を与えてくれる別の道を提示する。ただし、そのさい彼は周到にも、知も快を与えること、喜びがそれ自身鍛錬を要求する、それも度を過ごして要求するということを、忘れずに強調している。とはいえ、美学の場合と同じく、快楽主義という点でのフーコーの趣味も、もっぱら、極端なもの、逸脱的なもの、劇的なものに集中し、あまりにも他を排除しすぎるきらいがある。フーコーは、「［退屈な］日常生活を埋め合わせる中途半端な快」と自らが呼ぶものを退け（アメリカの「クラブ・サンド」、「コーラ」、「アイスクリーム」あるいは上等の「グラスワイン」などは、即刻却下である）、「快は途方もなく強烈なものでなければならない」、さもなければそれは「無」に等しい、と断言する。つまり「これぞまさしく真の快と言えるのは、ほとんど耐え難いまでに深刻で、強烈で、圧倒的なものであろう。［これを身に受けるとき］私は死に至るであろう」（一二九）。強いドラッグ、S・M、そして自殺でさえも、そのような極限体験のための最上の手段であると主張するに及んで、フーコーは、感覚主義者の持つ逸脱のオーラを放つ。こうした仕方で伝統に反発することにより、生の技術と死の技術を結びつける哲学の、融通の利かない生真面目さや伝統主義に顔色を失わせることができるだろう。実にソクラテスが、こ

れら（おそらくは切り離すことのできない）二つの技術という観点から哲学を定義するより以前のことであるが、ソロンの格言、「誰であれ、人は死の瞬間まで幸福とは呼ばれまい」が言わんとしたのは、死という最後の一幕で、人の全生涯の調和、意味、美しさが、すっかり台無しになることもある、ということであった。このように美的な自己-形成の倫理が歴史的に根拠づけられているとしても、フーコーの示すそれは、彼自身の好む快の実践によって不純なものになってはいないだろうか。この場合、十人十色（Different strokes for different folks）という諺は、サド／マゾヒズムの信奉者よりもはるかに妥当な日常的見識を示してくれる。［自己-配慮の］美的モデルの利点の一つは、従うべきいかなる厳格な規則も、いかなる完全な徳目も指示しないということである。たとえ美的モデルによって、われわれが皆、よりいっそう魅力的になるようにと促されることがあったとしても、この事情に変わりはない。そして、このことが示すのは、自己-形成においては、個々の自己がそれぞれ独自の可能性、能力、趣味を持つ、ということばかりではない。他ならぬ生のスタイルの多様性こそが、それぞれの生に固有の美的快を提供する、ということもまた、ここには示されているのである。

フーコーの「快の倫理」（一三一）を有効に批判するには、そのあえて伝統を逸脱せんとする方法を突いても、その快楽主義そのものをあげつらっても駄目である。むしろ、それが理論と実践のいずれにおいても、快の占める範囲全体をとらえそこなっているという点こそが、最も有効に批判され得るのだ。感覚的な快（voluptas）と精神の喜びとを混同しているとアドによって非難されたように、たしかにフーコーは、快い感覚刺激（titilation）から至福（bliss）に、愉快さ（pleasantness）から恍惚（rapture）に至る快の諸形式や諸価値について、比較分析することを怠っている。さらに残念なこと

に、劇的なまでに強烈なものや逸脱的なものばかりが強調されたために、快の範囲と種類が限定され、彼みずからが掲げた「われわれ自身を快に対して無限に敏感に」（一三七）するという目的に背く結果となった。同様の矛盾は、彼がゲイのS・Mを賞揚する際にもついて回る。つまり、ゲイのサド／マゾヒズムは、性器に集中する焦点をずらすことによって生じる性から離脱する快のゆえに、フーコーによって賞賛されるのだが、その一方で、ゲイのS・Mが「性の行為」（求愛の快というよりもこう言う方がふさわしい）へとどんどん没入していく点、および「身体のあらゆる部分を性の道具として」（一五一、一五二）用いる点が、支持されてもいるのである。――しかしこれはやはり性を離脱する方法とは言い難いだろう。

フーコーの倫理学の美的モデルは、あまりに内容豊かで、あまりに多く問題をはらんでいるため、["Dits et Ecrits" に収められている] 大部分が機会に応じて書かれた記事についてのこうした簡単な検討程度では、とうてい把握しきれないだろう。その長所なり欠陥なりは、むしろ、彼の著作全体、および、自己-配慮の倫理学としての実践哲学の、フーコーのそれと比較しうるような（美的、あるいはその他の）モデルといった、より広範なコンテクストに据えて検討されることが最も望ましい。ところで、自己-配慮に関する実践哲学のモデルは、西洋の哲学におけると同様、アジアの哲学においても存在しており、[3] 論者の研究の大部分は、このような哲学の伝統を生の技術として甦らせるのに捧げられている。したがって、フーコーの仕事は、とりわけ次の理由から論者の興味を惹くのである。すなわち、ここで見られた美的な自己-配慮という倫理学的観念が、彼の専門とする諸理論から、すなわち監獄の改革からレズビアンの解放に至る、数々の反体制的活動を引き起こしてきた社会理論、政

治理論、認識論から、論理的に浮かび上がってくる、というのがその理由である。

フーコーの見方に従えば、倫理的な自己－配慮は、自己をとりまく知の諸体系と権力の諸関係によって構造化されている。彼の初期の仕事に属する、広範囲にわたる系譜学的研究が明らかにするのは、病気、狂気、犯罪に関わるわれわれの学問が、いかに、一般市民を統治しようとする制度化された権力によって形成されてきたかということである。こうした知の諸体系による社会－政治的統治というコンテクストの内部に、自己－統治（self-government）という、明らかに倫理的な問題が浮上してくるのである。論文集 "Dits et Ecrits" のうちにまとめられたコレージュ・ド・フランスでの講義の概要は、彼が、刑法、医療、精神衛生の各体系と、これら諸体系がそれぞれに創り出した真理とに関する、特殊歴史的研究へと転じる前の、知と権力についての最も一般的な問題から始まっている。国家行政をできる限り抑制し、バイオポリティクス（biopolitics）*を導入することによってよりよい社会規則をつくる戦略、としてリベラリズムを論じた或る短編は、自己－統治という個人の倫理への、論理的な移行を明示している。この自己－統治が自己－配慮として規定され、最終的に美学的な観点から解釈されることとなったわけである。

フーコーの美的な自己－形成をこうしてコンテクストの中に据えることによって、自己中心的ナルシシズム、非政治的な自己陶酔といった、彼への非難に十分応じることができただろうか。もし自己が、［市民を］抑圧することによって正常化する「権力としての知」の諸体系の産物であるとすれば、そうした自己を何か根本的に新しいもの、伝統に随順しないものへと美的に造り変えることは、レジスタンスという名の建設的な政治活動と呼ぶことも、あるいはできるかもしれない。しかし今日、ダ

ンディであることやドラッグの愛好に、はたして政治的改革の最上の希望を託すことができるだろうか。集団自殺が、それよりもなお効果があり、喜ばしいものであると立証されうるだろうか。ジョン・デューイのようなプラグマティストは、政治を美的な自己－配慮に結びつけるための別の方法を力説していた。すなわち、参加デモクラシーの実践を通じて他者を配慮することによってこそ、自己は豊かになると強調したわけである。このようなおめでたい利他主義的な自己－形成の戦略を排除しない限り、フーコーが提起した代案は、このような戦略を問題化するのに有効である。しかも、〝独善的な解決〟よりも、問題形成こそが、フーコーの哲学が掲げるべき実り多き主張である。だが、問題形成だけではやはり不十分である。われわれは、自己と社会に対する美的な配慮を実現するために、よりいっそう有望な戦略を獲得する努力を続けていかねばならない。

（1）以下、ミシェル・フーコー著作集の英訳版、*The Essential Works of Foucault 1954-1984 vol. 1*, ed. Paul Rabinow (New York: Free Press, 1997)、第一巻から引用する。参照頁は（ ）の中に記す。

（2）Michel Foucault, *The Uses of Pleasure: Volume 2 of The History of Sexuality* (New York: Vintage, 1986), p. 9（ミシェル・フーコー『性の歴史II――快楽の活用』田村俶訳、新潮社、一九八六年、一六頁）

（3）以下を参照。Richard Shusterman, *Pragmatist Aesthetics* (Oxford; Cambridge, Mass: Blackwell, 1992)（リチャード・シュスターマン『ポピュラー芸術の美学――プラグマティズムの立場から』秋庭史典訳、（勁草書房、一九九九年）。Shusterman, *Practicing Philosophy* (New York: Routledge, 1997). この書は、フーコー、ヴィトゲンシュタイン、およびジョン・デューイの詳細な比較研究を含む。および Shusterman, *Performing Live* (Ithaca: Cornell University Press, 2000.)

＊　一八世紀中葉に形成された、国民ないし市民の生命の管理、調整を行う政治を意味するフーコーの用語。人口

の調整、福利厚生を目的とし、国民ないし市民生活に行政的に介入する政治手法を言う。それは、機械として見られた身体の調教を通じて国民ないし市民を効果的、経済的に政治機構に適合させる、一七世紀に発展した強制的行政法としての「アナトミカル・ポリティクス」とともに、種としての人間の生を生かし増強させつつ、個としての身体に強制を加えて従順ならしめ、人間を巧みに支配のうちに絡め取る、政治権力機構の二つの主要なテクノロジーとされる。（フーコー『性の歴史Ⅰ――知への意志』渡辺守章訳、新潮社、一九八六年、一七六―七頁参照…訳者注記）

美と芸術のシュンポシオン　神林恒道教授退官記念論集

2002年2月25日　第1版第1刷発行

編　者　大阪大学美学研究会

発行者　井　村　寿　人

発行所　株式会社　勁草書房

112-0005 東京都文京区水道2-1-1　振替 00150-2-175253
（編集）電話 03-3815-5277／FAX 03-3814-6968
（営業）電話 03-3814-6861／FAX 03-3814-6854
精興社・牧製本

©Bigaku Kenkyu-Kai of Osaka University 2002

ISBN　4-326-85177-5　　Printed in Japan

JCLS 〈㈱日本著作出版権利管理システム委託出版物〉
本書の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。
複写される場合は、そのつど事前に㈱日本著作出版権管理システム
（電話 03-3817-5670、FAX 03-3815-8199）の許諾を得てください。

＊落丁本・乱丁本はお取替いたします。

http://www.keisoshobo.co.jp